令和８年度　第２回　府市トップミーティング

日時：令和８年９月１５日（火）１０：１５～１１：１５
場所：京都市役所 正庁の間

○松井市長
おはようございます。それでは、令和８年度の府市トップミーティング２回目ということで、今日は西脇知事、わざわざ京都市役所に足をお運びくださいましてありがとうございました。そして府市の事務方の皆様にも色々御尽力いただきましてありがとうございました。まず冒頭ですが、この府市トップミーティングは８回目ということで、年に複数回、機動的に開催して、柔軟なテーマ設定で未来志向、そして成果重視の形で行ってまいりました。今回、これまでの取組の成果についても資料を配布させていただいているので、メディアの皆様はそれも適宜、御参照いただければありがたいと思います。
今日は府市の施策の混ざり合い、そして建設的な議論が展開できるよう、お話ができればと思いますので、よろしくお願い申し上げます。まず知事から開催に際して一言頂戴できればと思います。

○西脇知事
どうも皆さんおはようございます。まず初めに、災害の話をさせていただきますと、令和８年熊本地震と令和８年８月千葉豪雨でお亡くなりになられた方に、謹んで哀悼の意を表しますとともに、御遺族の皆様にもお悔やみを申し上げたいと思います。その後も北陸、この間名古屋と、また台風も近づいているということで、被災された皆様にはお見舞い申し上げたいと思っております。
そして、本日はお忙しい中、素晴らしい会場、また設えを準備していただきました松井市長はじめ京都市役所の皆様にも心から感謝を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。
現在京都府では、総合計画の改定に向けた議論を行っておりまして、先週７日に、第３回の有識者会議を開いて中間案をお示ししました。明日、京都府会９月定例会が開会いたしますが、そこでも中間案を御審議いただく予定ということになっております。総合計画案では、これまでの社会経済情勢の変化を踏まえて、国内外を魅了してきた京都の精神性というものを次世代に伝えていくために、「わくわくする京都」を目指すことにしているわけでございますが、これはそもそも１年前のこの府市トップミーティングで京都の魅力の源泉に関する議論を行ったものがスタートとなっておりますので、今日はその「わくわくする京都」という我々の目標の実現に向けて、今後の指針となるような大きな議論ができればありがたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

○松井市長

ありがとうございます。よろしくお願いいたします。初めに、マスコミの皆様には資料を配布させていただいておりますが、これまでの合意事項、今日御報告申し上げたいのは３点ございまして、１つは京都版ミニ・ミュンヘン。今年も更に熟度を高めて開催をさせていただきたいと思っております。それから、寛永行幸四百年祭。この前、式典がございましたし、記念の能もございました。そして、消防体制の強化に関する取組状況を説明し、その後、今日はフリートークに重点を置いて進めさせていただきたいと思います。まずは西脇知事から、京都ミニ・ミュンヘンと、それから寛永行幸四百年祭の御説明をお願いできますでしょうか。

○西脇知事

資料を見ながらお聞きいただきたいと思うのですが、資料の中身に入る前に、ミニ・ミュンヘンについて若干経過をお話ししますと、元々ドイツのミュンヘンで２年に１回、子どもたちだけでまちをつくるというのをかなり大規模にやっておられました。それを我々は参考にしながら、子どもの自主性とか社会性を養うだけではなくて、京都の場合はそこにスタッフとして高校生、大学生を入れて、若い世代に子どもと触れる機会をつくろうということで、京都版ミニ・ミュンヘンというのを京都府域で始めまして、昨年から松井市長と連携したということで、「京都版ミニ・ミュンヘン in 梅小路」というものを昨年開催いたしました。それの第２弾を 10 月 17 日に開催することにしております。もう既に 440 名の子どものスタッフがワークショップを行って、どんなまちをつくりたいかとか、実際のお店の看板とか商品とか、当日に向けてゼロからさまざまな準備が進んでおるところでございます。５日には、京都市会の議場をお借りして、まちの名前とか通貨の名前を決定する投票を実施したのですが、やはり昨年の成果を引き継ぎたいという子どもの思いもあって、昨年度と同じまち「梅小路ニューシティ」というのと、通貨の名称も「プラ」。これは梅小路の梅でプラムのことなのですが、それになったと聞いておりまして、なんとなく取組がつながってきているなという感じを持っておりますので、是非とも府市で連携して、レガシーとなるようなものにしたいなと思っておりますし、そこに書いてあるように、様々な企業さんとも連携をしていきたいなと思っております。

それから２枚目の寛永行幸四百年祭、これは御承知のように、1626 年、後水尾天皇が３代将軍徳川家光の招きで、御所から二条城に行幸された、その寛永行幸から 400 年の節目の年ということで、様々なイベントが、この前も寛永行幸四百年祭記念能が金剛能楽堂で行われたりしておりますし、それぞれ美術館と博物館でも展示等々を行っておりますが、そのメインイベントを 12 月６日の日曜日に、この行幸行列の主要なシーンや、楽人ですね、雅楽の演奏者による雅楽演奏等を再現するイベントを開催する予定にしております。これは装束の復元製作はもとよりですけれども、参加していただく方に礼法

とか所作の研修も行うなど、様々な工夫を凝らしながら、日本文化の源がこれからの未来へつながるようなイベントにしたいと思っておりますので、取材等も含めて、是非御協力をお願いしたいと思います。私からは以上です。よろしくお願いいたします。

〇松井市長

ありがとうございました。それでは私の方からは、３件目の消防体制の強化、消防ヘリの２機同時運航体制を府市協調で整備させていただくということについて簡単に御説明します。これは昨年度、令和７年度の３回目のトップミーティングで、京都市消防ヘリの２機同時運航、これは府市広域の消防体制の強化に向けてできないかということで、運用面・人員体制の具体的な内容について取りまとめていくということで合意させていただいた。それを受けまして、先般、９月１日に、西脇知事と「京都府広域航空消防防災体制の整備に関する基本協定」を締結させていただきまして、府市が連携して京都市消防ヘリの２機同時運航の開始に向けた体制の確保に取り組むということを確認させていただきました。その概要としては、京都市消防ヘリの２機同時運航体制の確保に向けて、京都府に経費の一部を御負担いただくことや、あるいは府市が府内消防本部とも連携し必要な人員を確保すること。また、京都府は京都市の承認を得て、他の地方公共団体と京都市消防ヘリを用いた応援協定、これは今まで府県連携のようなものがなかったものを、京都市がしっかり連携して、そのようなものを締結できる体制ができるということなどが含まれています。この後、来月 10 月に府内消防本部の職員を消防航空隊員として配置していただいて、研修期間を経て、令和９年１月中の２機同時運航体制の運用開始を目指すこととしております。引き続き、京都府、府内消防本部と連携して、府内全体の消防防災体制の強化を図っていきたいと考えています。一言だけ補足しますと、長年、この消防体制をどうするのか、このヘリの運航体制を負担面でどうするのか、という問題は、この府市トップミーティングを令和６年度に開催する前は、府市懇というところで、お互い要望事項を述べ合うというのを年に１回やっていて、なかなかその中で解決が図られてきていなかった話であります。最初に知事とトップミーティングの持ち方をお話しした時に、知事の方から「是非課題をお互いに述べ合うというのも大事なことだけれど、それをどう前向きな協力関係の中で解消していくのか。できることから前向きにやりましょう」という御提案を受けて、この府市トップミーティングの冒頭から、ある種の従来の府市懇談会をどう変えていくかということの、１つの具体的な成果として形になったものだと思っておりまして、京都府、あるいは府内の消防本部の皆様方の御協力に心から感謝を申し上げる次第です。

これまでの合意事項についての取組の発表は以上のとおりといたしまして、フリートークの方に入らせていただければと思います。フリートークは、是非、自由討議ということにしたいと思いますが、もちろん全体の時間の加減がありますので、知事も私もメモに目を落としておりますが、そこら辺も含めて自由に。元々メモには２人がそれぞれ

話をしたいことを大体書いているので、フリーに話をしていきたいと思いますが、実は今回のトップミーティングの１つの特徴だと私は思っているのですが、いろんな玉を仕込んで次に向けてやるということは、これも今後、今日の話を次につないでいく必要がありますが、できたら大きな枝ぶりと言いましょうか、フリートークでトップミーティングがどんな役割を果たしてきたかも含めて、ちょっと回顧してみたいと思います。

ちょうど１年前の９月の頭だったと思いますが、令和７年度の第２回のトップミーティングで、京都の本質的な価値とか魅力、そうしたものについて今、一部失われかねないという状況になっていると。その本質的な価値というもの、あるいは根源的な課題にどう向き合うかということについて、フリートーキングをさせていただいたんですね。あまり新聞報道にはならなかったような記憶が、１年前ですがありますが、ただそのような議論、「この京都が京都であり続けるために何が必要か」。まさに知事が先ほど総合計画に取り組んでおられるという話がありましたが、私どもは昨年、基本構想を議論している時に、まさにここ、トップミーティングで議論したことも問題意識として踏まえて、基本構想を策定させていただいたんです。そのような意味で、この１年前の京都の本源的な価値とか課題をどう捉えるかということについて、問いかけた結果として、経済界の方々にもそれは反応がありまして、「京都の本物（ほんまもん）が失われているのではないか」と。京都商工会議所も「ほんまもんを結わう」というキャッチフレーズを作られましたし、我々も基本構想の中で「本物（ほんまもん）」という言葉を出させていただきました。そこから京都未来戦略会議が始まって、京都未来戦略会議の中で、とにかく重点を絞って議論しようということで、教育・人づくりや交通インフラについて今議論をしているところであります。これから、この京都未来戦略会議も取材された方々もいらっしゃると思うのですが、まさに京都市の一番重い課題の１つは観光。これからインバウンドというのは、国際的な潮流を見ている限り、それが減少に転ずるということではなくて、ジェット機を使って旅行される人口が増えていって、北東アジア、日本、そして京都への関心は非常に高い状況にあります。そのような意味では、これからも日本を、京都を訪れる方々が増える中で、どんな風な、例えば市民生活、特に交通ですね、京都未来戦略会議で話題になった市民の足をどう守って、観光客の動線をどのように、市民の足と今は交錯していて、その中で様々な対症療法を展開しているわけではありますが、この今後の需要を見据えながら、どんな新しい交通システムを作っていくかということについては、これは非常に大事な問題でありまして、新しいテクノロジーをどう入れるかということだけではなくて、例えば市内に関して言うと、その基幹の路線とフィーダー路線のようなものをどう組み合わせるか。供給面で、様々な運転士の不足とか車両基地の不足、車両基地の制約があって車両の台数なども限られている。そのようなものをどうするかを含めて、色々な意味でのベストミックスを作っていかなければいけないのですが、「グランドデザインが大事だよね」という議論があったと同時に、やっぱり新技術を試せるような実験フィールドみたいなものを作っていくことが必

要だという風に議論が展開されたのは、皆さん御承知のとおりであります。この他にも今の交通問題を１つ取り上げましたけれど、京都のまちが直面している根源的な課題というのは様々あると思うのですが、これは知事が冒頭仰いました、総合計画の策定検討委員会というものも開催されていますが、総合計画の中間案を示された知事からも、今の本源的な価値についての、あるいは課題についての見解をお示しいただいたらありがたいかなと思います。

○西脇知事

ありがとうございます。今、市長からも触れられましたけれども、昨年の第２回のトップミーティングで、京都のその本質的な価値が毀損されているのではないかという問題意識を言った時に、ちょうどその頃、京都商工会議所の方で確か「インバウンドの観光客が増えていることによって、国内の方々の観光客が減っているのではないか」ということが一般的に言われているけれど、何のエビデンスもないのではないか、という会頭の問題意識から調査をしようというようなことの過程の中で、そのような議論があったと思っておりまして、我々もその時は、市長とこのトップミーティングで議論をしたのですが、その後、市長が仰られた京都未来戦略会議は、経済４団体と京都大学、立命館大学、そして私と市長とが議論しています。それも、やはり京都の本質的価値という形で議論したと。その中で、今我々の京都府の総合計画の改定作業の中で、これも去年の時も言っていたのですが、京都に沢山の観光客、オピニオンリーダー、それは哲学者や、学者、企業経営者、色々な方が来られる。それを引き寄せている魅力は何なのかというときに、豊かな自然とか、神社仏閣、生活文化、知の集積、先端産業等々を魅力というように定義していました。この間、京都の魅力をどうやって次世代に引き継ぐかということを議論していく中で、私どもは様々な有識者から、それぞれ今示したものが魅力としてあるけれども、外国の方に聞くと、背後にある京都の魅力というのが何なのかということを考えて、今回、もう既に公表していますけれども、その中間案ではそれを「京都の精神性」というように定義付けました。これはなかなか難しくて、多分「文化」という言葉は今まで使ったかもしれませんが、もう少し広い概念で「精神性」というようなことで、それをまちの至るところにそのようなストーリーがあるのではないかという、その京都の精神性が宿る京都の営みというものを大事にしていこうという定義をさせていただいて、それを先人の皆様が、守ったり、高めたりしながら引き継いでいく。それぞれのその時の先人の皆様は、その営みを「わくわくする」気持ちでされたのではないかということで「わくわくする京都」をつくるという難しい定義付けだったんですけれども、今回の中間案では、一定、そのような結論を出しています。それともう１つは、この間、私の前の２期目の総合計画からこの４年間を見ますと、何と言っても人口減少が非常に深刻化しているとか、気候変動が、今年の特に雨を見ても激甚化・頻発化しているし、農産物も大変だと。そしてAIですね。これも皆さん、AnthropicとかOpenAI

でAIが人間の制御を振り切って、ほかのネットワークを攻撃するようなことが起こったりしているとか、それと国際情勢も相変わらず不安定。そのような激動の時代であっても、その京都の精神性を磨いて次代に引き継いでいかなければいけない。それをキャッチフレーズとして「わくわくする京都」というようにつけました。ずっと喋っていると総合計画のPRになってしまうのでこの程度にしておくのですが、そのような京都をつくっていくために、総合計画の中間案では15の京都の未来像というのを示して、これから府議会での審議に入ることにしているということで、まさにずっとそこが連なっていて、京都未来戦略会議から京都市の基本構想、そして我々の府の総合計画と。それぞれに盛り込まれている具体の個別の施策というのは、少しずつ、全く同じものはないのですが、これはそれぞれの施策を具体化する中で、すり合わせたり、より大きく行動したりということになっていると思いますが、方向性としては、京都をどうやって未来に引き継いでいくかという意味においては、同じ土俵に立っているのかなと思っています。

○松井市長

はい、ありがとうございます。その「京都の精神性」というのは、我々自身が京都基本構想の中で問いかけたことと、実は言葉は違っても同じことのような気がします。後でお話をしたいとは思うのですが、例えば、我々が京都学藝衆構想をこれから具体化しようと思って、今年度から色々なことをやっているのは、まさにその職人技にしても、伝統文化、伝統工芸、伝統芸能、あるいは文化全般、あるいは自然との関係。これらがそれぞれ、京都の精神性を職人芸に体現したものだったり、文化に体現したものだったりするのだと思って、それをもう1回京都の中で噛み締めなければいけないのではないかと。それを噛み締める舞台、あるいはその精神性を体現しておられるような人材の具体的な活動というものを、意外と若い人たちが見ていない、体験していない。そこをどう体験させるかということだったので、今の精神性、あるいは我々のキーワードで「夢中になる」。これは知事が仰る「わくわくする」ということと同じで、わくわくして非常に楽しいから夢中になって、寝食を忘れるという言葉は働き方改革と私は矛盾しないと思うんです。やはり本当に自ら打ち込むということを大切にしたい。それは京都学藝衆構想などと非常に呼応する概念であります。

それから、もしよろしければ知事からもコメントをいただきたいのですが、最初に私が申し上げた京都未来戦略会議の大きなテーマになっている、交通の在り方。これは当然、府と市は交通の捉え方が違って、府はより広域で捉えておられる。道路のネットワークであるとか、幹線鉄道、高速鉄道、あるいは様々な地域の鉄道もあります。そのように捉えておられる府と、我々、どちらかというと、市バス・地下鉄とか、あるいは歩くまち京都とか、よりミクロで、観光と市民生活をどう調和させるかという視点で捉えている京都市と見方は違いますけれど、その辺りも含めてこのまちの、あるいはこの地

域の将来的な発展に関して、私はやっぱり具体的に調査をしなければいけないなと。それこそ昨日、知事の所も訪ねられたと思いますが、近畿運輸局長さんがお訪ねになられ、そんな話もしていました。それから、この前、交代となった京都府警察の吉越本部長とも、これからの交通流量というものについて、よく意見交換をしなければいけないという話をしていたのですが、ここの都市と交通というのも非常に重要な問題かなというように今お話を伺いながら感じましたが、もし知事、その辺りについて何かございましたら。

○西脇知事

交通インフラに行く前に、「わくわくする」というのは非常に抽象的だという話もあって、実は「夢中になる」というのも同じで。中間案の中では、わくわくするというのは特に京都ならではと定義づけるために様々なことを書いているのですが、元々根っこは子どもたちが外で遊ぶのにわくわくするとか、遠足の前の日にわくわくするとか、高齢者の方も「明日ゲートボールがある」ということでわくわくするとか、色々なわくわくがあって、そのベースの中に、ただやはり高揚感とか楽しさだけではない、京都ならではのわくわくもあるのではないかということで定義をさせていただいておりますので、その辺りは、具体の施策にどう織り込んでいくのかというのは、まさに京都市の基本構想の「夢中になる」と、府の総合計画と同じ流れの中にあるのかと思っております。

今、交通の話がございましたが、１つは交通というのは、特に道路はそうですが、つながるということが必要なので、京都市と京都府という行政界で遮断されるものでは全くなくて、ネットワークとしての必要性があるので、どちらにしても広域という概念もさることながら、実は都道府県レベルでも、もっと広域でもつながっているわけなので、一緒になって交通問題を考えていくことが必要だと、まず間違いないと思います。それから今、例えば高速道路で言えば、京都府内で残っているミッシングリンクが大きく２つ、南の新名神高速道路と北の山陰近畿自動車道なのですが、それ以外にも幹線の交通ネットワークがあるのですが、これは整備されると、必ずその現地に影響が出るだけではなくて、それがつながっている更に先へも、物流であるとか企業立地という影響が出てくるので、一緒に考えざるを得ないということもありますので、これは是非。我々の総合計画の中では「次世代の交通のモビリティ戦略」をつくると言っています。これはどちらかというと地域公共交通を意識して書いたものなのですが、そのような交通を巡る様々な課題は、京都府と京都市は同じ土俵の中で検討しなければいけないのではないかと思っております。しかも今、バスは、市バスもそうかもしれませんが、運転士不足ということがあって、一方で自動運転という非常に大きな流れの中で、これも我々はけいはんなで実証実験をやっていますし、市は洛西で実証実験をやっていますが、これは多分、それぞれのまちの性格に合わせながら、お互いに高め合っていくことが必要なのですが、いずれは１つの確立した技術として実装されていくと思いますので、そのよう

なことも含めて一緒に議論させていただければありがたいなと思っています。

〇松井市長

ありがとうございます。この話題はそろそろ時間の関係もあって終わりにしたいと思いますが、今、知事が仰った交通のネットワークがつながっている。そして同時に、我々から言うと、やはり京都駅前のまちづくり１つをとっても、交通ネットワークをどうこれから整備していくかによって、そのまちの風景も変わっていく、まちづくりともつながっている話だと思います。それから場合によっては、これは府警さんとよく相談しなければなりませんが、一部社会実験を過去にさせていただきましたが、交通についてどんな規制をするのか。東大路の丸太町通の所の実験も、一定期間府警さんの協力によってやらせていただくということもありましたが、そういった意味でも色々な関係機関が所管を越えて取り組まなければいけない話だと思っております。

そして、次の話題に時間の関係もあり移りますが、京都の魅力という意味では、やはり産業というものも議論しておく必要があると思うんです。若干、今日の報道などもありましたが、知事の方からこの産業、京都の魅力の１つである産業についての議論をお願いできますでしょうか。

〇西脇知事

ありがとうございます。前回のトップミーティングで合意した「AI×半導体×ものづくり産業の成長戦略」のその後の動きも含めてお話をさせていただきたいなと思っております。ものづくり産業というのは、京都の魅力、産業の魅力の本当に大きな源泉の１つだと考えていまして、しかも AI がこれだけ浸透してきますと、半導体が京都のものづくり産業の変革のキーデバイスになると認識しております。ただ、半導体に関係されている中小企業の皆さんと意見交換をしていますと、自社の製品が半導体産業にどう活用されているかを知らない。半導体関連企業であるという認識がない企業がある。ものすごく素晴らしい技術で素晴らしい部品・製品を作っておられるのに、それがどう活かされているか認識がないとか、一方で、半導体をビジネスに取り入れる必要があるという認識は持っているけれど具体的な連携先が分からない企業などが非常に多かったので、この４月に「京都府内半導体関連企業マップ」を公開いたしました。企業秘密等々の様々な壁があったのですが、その上で、今回、半導体関連企業や大学の方から御意見・御助言を頂きまして、AI 時代に向けた京都のものづくり産業の成長戦略を策定して、昨日発表させていただいて、今日は一部報道でも詳細にお知らせがあったと思うのですが。戦略の中身の紹介は省略しますが、やはり取り組む施策としては、もちろん半導体を作る、それから使う。そのようなエコシステムを構築することと、人材の育成、そして、これはもう先端産業で、世界に冠たる京都の企業の皆さんも、背景に中小企業なりの優れた企業技術を持っている企業群があることが京都の産業の強みだと明確に仰っ

ていますので、その中小企業と、そこでの人材育成、そうしたことを府市で取り組めれば良いなと思っています。戦略を発表いたしましたので、これはまさにこれからどんどん具体化していくということで取り組んでいきたいと思っています。

○松井市長

ありがとうございます。これは、一緒にやってきたので当然なのですが、知事の御意見に全く同感でありまして、半導体、特に中小企業。どちらかというと京都府さんは、グローバルな展開とか、グローバルネットワーキングというところに強みをお持ちで、当然広域自治体ですから、そのような広いつながりを。我々はどちらかというと、それよりミクロに、中小企業、地域企業にどうつなげて優れたサプライチェーンを作っていくかということについて、より特化した役割を果たしていくべきと思っております。

２つの視点があって、まず半導体を作るという視点から見たら、やはり半導体の様々なAI が普及して、様々な種類の半導体、あるいは半導体製造機器への需要が急増していまして、色々な事業者さんにお話を聞くと、色々と予想して設備投資はしてきたものの、なかなか業界全体で供給力を確保することが課題になっていると。そのためには、やはり行政には中小企業、その地域企業を含めた生産性向上に向けた支援が特に求められていると考えておりまして、昨年に色々な京都の半導体関連企業を対象として調査をしましたが、やはり大企業と地域企業、特に中小企業のビジネスマッチング支援のニーズが高い。高精度・短納期で対応できるようなサポーティングインダストリー群が形成されていることが非常に大事だと多くの関係者が認識しています。ただ実際、半導体は、我々の調査の中でその報告書を提示しましたから、御関心のある方はまたお示ししますが、半導体の製造プロセスで 500 以上の工程に分かれていて、また半導体製造機器メーカーごとに全く異なる事業とか製品を扱っているので、一律的な行政マッチングではなかなか成果は出にくい。そんなこともあって、京都市としては具体的な技術ニーズ、地域ニーズに即した個別の技術マッチングに、できるだけ我々がチームを作って、関係機関と連携、関係機関の専門家と連携することが必要なので、そのような技術マッチングをきめ細かくやっていくというチーム編成が必要だと思っております。それを推進していきたいと思っております。

それから、半導体を使うという視点で言うと、中小の地域企業は、品質あるいは納期なども、非常にハイスペックな要求がある半導体業界に参入するためには、やはり AI を上手く活用して生産性向上、あるいは業務の自動化に取り組む必要があると。そんな意味で、京都高度技術研究所(ASTEM)では、AI とかロボットの導入に向けた伴走支援に取り組む「AI・ロボティクス・セキュリティ等導入促進プラットフォーム」を構築したところであります。このような成長戦略を軸として、半導体産業の現状ニーズを踏まえて、大きなグローバルの視点でのネットワークと、きめ細かい支援というものを、府市協調で連携して取り組んでいきたいというのが、私どもの考え方でございます。

○松井市長

他にも議題がありますので、それでは先に進めていきたいと思います。京都未来戦略会議で、先ほど申し上げた交通の問題も大きな課題として位置づけられましたが、京都未来戦略会議の冒頭の議題、最初の入口は、教育・人づくりでありました。これをさらに深掘りすることになっていますが、京都市としては、明治２年の番組小学校、この町衆の力、64 の番組小学校を町衆の力でつくったところから始まって、今の京都大学の前身である第三高等学校を誘致するなど、明治維新の非常に危機的な状況の中で、このまちの京都の存亡の危機を救ったのは、やはり人づくりの取組だと考えております。人づくりの取組は時間がかかります。しかし、これは何より大事なことで、２年前、初めて府市トップミーティングを行った時に、知事との間で最初に合意したものの１つが、府立高校・市立高校の垣根を超えて探究学習に取り組もうということで、最初に探究学習、探究エキスポを令和６年の 12 月に行って、もちろん探究エキスポを行う前に、府市のそれぞれの高校での取組がもう夏場ぐらいから始まったわけですが、去年からはそれを更に深めた探究クエストを実施して、今３サイクル目に入っていて、この前、そのDay1、Day2、Day3 ということで 30 名ぐらいの府立高校・市立高校の生徒たちが、１日合宿のようなものを３回やっている。それに知事と私も参加させていただいたわけですが、これを更にレベルアップしていかないといけないと思っています。

ネクストステップでは、我々が京都学藝衆構想という、さっき知事が仰った精神性とも関連する、我々が夢中になるいろんな匠の技を、いかに市民講座として、しかし、市民・非市民の垣根なく、また老若男女の区別なく行っていこうという、そのような理念も踏まえて、例えば大学、産業界、文化芸術分野、地域社会など、様々な京都が有する知の集積、あるいは実践のフィールドを活かしながら、高校生の探究学習の一層の充実、あるいは裾野の拡大を行っていきたいと思います。

この間、京都未来戦略会議でも多少話題になりましたし、個別の大学の先生方とも話をしているところなのですが、例えば個別の大学と連携協定を結んで、意欲のあるゼミの学生さん、あるいはゼミを主催しておられる先生方、教授方も含めてなのですが、例えば学生さんに TA（ティーチング・アシスタント）として、その探究学習に寄り添ってもらうというようなことも、私はこれから考えていけるのではないかなと思っております。そのような意味で、京都未来戦略会議は、探究学習の底上げをオール京都で応援していくというようなことを、経済界も言っていただいているところでありまして、この辺りを、京都府・京都市・経済界で具体的な取組を前に進めて、生徒１人１人が本物に触れて、地域や、あるいは世界とつながりながら、問いを立てて学びを深められるようなものをしていかなければと思っています。折しも令和 10 年９月から、京都市では中学校の部活の地域展開を実施する予定で、これは「京クラ」と言っておりますが、その時に例えば経済界にも御協力いただきながら、伝統産業・伝統工芸などの文化系、ある

いはSTEAM教育の充実としてサイエンスやテクノロジーという科学とか環境、そういったものを、当然スポーツもあってしかるべきかもしれませんが、同時に科学の分野、あるいは文化とか工芸の分野、こういったものをも含めて、しっかり部活の地域展開と合わせて、このような探究的な学び、先ほどの「わくわくする」あるいは「夢中になる」学びを具体的にサポートしていくということを考えていきたいと思っておりまして、私も、昨日、京都大学に伺っておりまして、京都大学とも話をしましたし、京都未来戦略会議のパートナーである立命館大学の理事長さんとも話していますが、そんな大学の関与、これも具体化していきたいと思っているのですが、非常に探究学習への思いが深い知事としても、何かこの探究学習についての意見をお伺いできればありがたいと思っております。

○西脇知事

今、市長から紹介がありましたように、松井市長が誕生して最初の４月のトップミーティングで合意したのが、京都府立高校と京都市立高校の垣根を超えた連携ということで、合意事項としては、その時は探究学習だったのですが、事前に色々話している時には「どのような形の連携がいいのか」ということで、年度の途中ということもありましたけれども、探究学習を合同でやろうと。考えてみれば、その後にAIの開発が一気に進んで、皆さんも御承知のようにAnthropicとかOpenAIとかで、その暴走を懸念するところまで開発が進んでいるという中で、改めてAI時代における、いわゆる「問いを立てる力」の重要性も言われているという、ちょうど時代背景とマッチしたのが探究学習でした。探究学習は前から行われていたのですが、それが非常に時機を得た感じで、しかも府立高校と市立高校の垣根を取っ払うということで、非常に良かったと思っています。

探究エキスポを２回やって、探究クエストも２回やりましたけれども、そのような意味では、この探究学習をどんどん進化させたいという思いがありまして、その一環で文部科学省と日本学生支援機構が実施する「トビタテ！留学JAPAN」の拠点形成支援事業に手を挙げて、それが採択されて、今年度から『京の高校生「海外探Q留学」応援事業』を実施しておりまして、市長にも来ていただいて、今年度の派遣留学生を決定して、壮行会をやりまして、100名の生徒です。参加した学生たちからは、「本当に現地では失敗しても寛容で、それを聞いて何でも恐れずに挑戦してみようと思った」とか「言語を含めて文化とか背景が違う中で、意思疎通が難しいからこそ、リアルなコミュニケーションの大切さが分かった」など、様々な感想を聞いています。これは本当に引き続き、海外での探究を通じて、新たな尖った人材を育てていきたいと思っておりますし、市長ともまたこの探究学習をどうやって深化させていこうかということについては、引き続き議論をしていきたいと思います。

この間、清水寺でやった探究クエスト、みんなの議論を横で見ていましたけれども、

子どもって、それぞれかなり１人１人個性があるなというのが分かったのと、後で感想を聞いたら、「こんなに知らない生徒、違う学校の生徒と喋れるっていうことがいかに刺激的か」と感想を述べている生徒さんもいて、色々な形でこの探究学習をどう深化させていくのかというのは非常に重要です。しかもこれは、市長と私がいつも言っている「できる限り若い世代から社会とつながる」とかそのようなことの一環ということでもあるということなので、是非ともまた更に深めていければと思っております。なかなかすぐに出る知恵はないのですが、議論させていただければありがたいと思います。

〇松井市長

ありがとうございます。たまたまかもしれませんが、探究クエストで、今回も哲学者の話を Day1 で聞いて、それでそれぞれお寺で自然と向き合ったり、お庭と向き合ったりして、最後また森清顕さんが「AI は友達なのか、ツールなのか」みたいな根源的な問いを発せられて。その宗教者と、まさに精神性ですよね。少し AI では得にくいような、説法というか、あるいは哲学者の問いを問いかけられて、それを現代の課題の中で、頭の中で結びつけるというトレーニングは、このようなものをやっているところ、一昨日森清顕さんからも言われたのですが「こんなのをほかのまちはやっているんですかね？」と。「おそらくないと思います。こんな貴重な機会はないと思います」という話をしていたのですが、例えば京都版ミニ・ミュンヘンにしてもそうですが、子どもたちがやはり社会のことを、しかも自分に問いかけながら、問いを磨くという、このような発想は非常に面白いので、全体としても面白いことが起こっているなと。ただ、成果が出てくるのは、おそらく５年後、10 年後、彼らがどんな大学生になってとか、どんな社会人になったという風に成果が出てくると思うのですが、その辺り、ミニ・ミュンヘンも含めて、この人づくりの取組で知事が感じられていることとか可能性とか、もしあったら一言。

〇西脇知事

１つだけ言うと、Day2 では、天橋立と苔寺でやったのですが、天橋立へは市立高校の生徒さんの参加が多かったのですが、一昨日の探究クエストで見ていたら、やはり宗教と自然とかそのようにポストイットにいっぱい書いてあって。だから「お寺さんだけじゃないんだ」みたいなこととか、自然風景だけで天橋立が成り立っているわけではないと。雪舟の絵を見て、全然絵というものは違うものだと思ったという、そのような色々なことを感じられるということがあるので、それを引き出すきっかけを作るというのは非常に重要かなと思いました。

それともう１つだけ言うと、彼らは我々よりもはるかにネットワークだとか、AI とかスマホとか、我々が便利だと感じるものを、彼らはもうベースになっているという。

○松井市長
　いわゆるAIネイティブというものですね。

○西脇知事
　だから、よりなんとなくこう高い精神性の話をする土台があるのではないかと少し感じたところはありますね。

○松井市長
　なるほど。だからこそ体験とかが生きてくるということかもしれませんね。「トビタテ！留学JAPAN」などを含めて。ありがとうございます。
　もう１つ議題もあるものですから、前に進めますが、次にお話したいのはレジデンスのことです。これは私もこの間ずっと大事だと思っているのですが、狭い意味での観光都市をちょっとアップグレードするというと、アップとかダウンとかあまり簡単に使うべきではない言葉かもしれませんが、狭い意味での観光都市ではなくて、せっかくこの京都の、さっき仰った精神性に満ちた、そして色々な技能とか技術とか学問を学んでおられる方々が多いまちなので、もっとこの「滞在する」ということにスポットを当てるべきではないかというように私は思っていまして。遡ると、明治で京都が没落しかけた時に救ってくれたのは、さっき申し上げましたが、多くの大学がこの地に集まってきて、あるいは大学へと発展して、若い人たちがこのまちに一定期間住み始めて。それが一定期間であるというのは、ちょっと我々にとってはもう少し長く住んでほしいという思いもあるのだけれども、他方で、やはり日本中・世界中からこの京都のまちで学ぼうという人たち、あるいは知的な活動をしよう、研究しようという人たちが集まってきたのが、京都のまちが滅びなかった、むしろ復興した大きな要因ではないかと思うんです。そのような意味では我々は、その大学もこれから放っておいたら大学の数とか減っていく時代です。人口に対する学生の割合はまた向上していき、今11%近くあるのですが、観光だけではなくてもっと長逗留していただく。その長逗留のシンボリックな事例は、大学の学生であるとか研究者ということなのですが、そのようなクリエイティブな人たちがここに生活拠点を置いてもらうということがすごく大事ではないかということで、先日来「クリエイティブ・ステイ」というようなことを標榜して、クリエイティブな人々を内外からこのまちに集めて、滞在してもらうような集積地を作りたいという話をしております。
　滞在に当たっては、特に京都の今の状況で言うと「ではどこに住めというのだ」という話があって、それであれば、セーフティネット住宅という基本的な特徴はありますけれども、今は目的外利用で色々な幅を広げているわけですが、京都府には府営住宅がありますし、我々は市営住宅という公営住宅も有効に活用できないか。もちろんそれ以外にも、京町家を更に有効に利活用できないかとか、お寺などの宿坊を活用させていただ

けないかとか、色々なアイデアがあるのですが、先般、私は記者会見でも説明しましたが、醍醐中山市営住宅で、自治会の加入とか自治活動に参加していただくことを基本に、文化芸術関係者向けに住宅を提供することを発表させていただきました。このようなことを１つとっても、これを更にどう広げていくかが大事だと思いますし、その大事なことは、クリエイティブな人が短期で滞在して、昔、ジョブズが苔寺に何回も行って庭を見られた。それはそれで結構なことで、それがひょっとしたらAppleの製品開発につながったかもしれないのですが、もっと大事なことは、やはり地域のローカルと交流していただくことが大事で、その交流という意味では、先ほども申し上げたような京都学藝衆構想の中に、そのような人たちも学びの輪に入ってもらう、あるいは「教えかつ学ぶ」というような輪に入っていただくこともすごく大事だし、実は京都の自然体験・文化体験というものも、自然が非常に近いまちで大事なので、そのことが結局、長逗留していただく方が京都市民になるかどうかは別としても、これはよく言っていることですが、「0.1市民」として京都を愛してもらう。IVSでアイバン・ザオが、京都で暑い暑い中でソフトを作ったときの思い出をすごく語っていただいて、彼は京都ファンになってくださっているんですよね。そのようなことをどう推進していくか。

昨日、私も京都大学に伺っていたのですが、湊総長ともお話をしたのですが、やはり国際卓越研究大学に認定された京都大学と府市が連携協定を結んでいて、もっともっとこの京都大学をはじめとするアカデミアと連携して。アカデミアはもっと知の集積を求めている。今、京都大学もポストドクターを、世界中から優秀な人たちを集めていきたい。ではどこに住むかという話があって、そのような人たちに、研究者の方々、ポストドクターの研究者の方々に、例えば１学期間でもいいからサバティカルで来てもらって京都で研究してもらう。それがもっと長くてもいいのですが、そのようなレジデンスを提供していくというのもすごく面白いし、我々はそこで交流も合わせてつくっていきたいと思います。我々はプラハに６月に行ってきたのですが、あの時もカレル大学から「６週間くらい夏に京都に行きたい」という、東洋文化に関心のある大学院生とかがいるので「レジデンスはないですか？」みたいなことも言われました。その辺りとも連携したレジデンス構想というのを、私は、大事なことは内外問わず、とにかくクリエイティブな人たちを呼んでいきたいという思いがあるのですが、それをぬか床のように交流してもらって、京都の文化の発酵力、ぬか床ですから発酵力を高めていくということが、これから更に京都のまちの魅力になっていくと考えています。

実は京都府でも、これは知事とも色々な話をさせていただいて、私もこのような構想に至っているのですが、今、総合計画案の中で「KYOTOレジデンス拠点」というようなことも御検討だと伺うのですが、このあたり知事から御発言いただけますか。

○西脇知事

簡潔に申し上げますと、今、御指摘ありましたように、総合計画の中間案の中では、

京都市とか経済界と連携した「KYOTO レジデンス拠点」の整備を掲げていまして、これまさに市長のお話と全く同じなのですが、やはり国内外の著名な研究者とか文化人・芸術家、起業家の方に、ある程度の中長期に京都に滞在していただいて、しかもそれと地元の方、様々な方と交流するとか共同研究するとか、創作活動をするということで、新たな研究・文化・産業の創出につなげたいと考えています。これは社交交流の場なのですが、先ほど言いました「わくわくする京都」の解説の中で、中間案に書いてあるのですが、先人の皆さんはやはり社交交流の場を作り出して、要するに京都は舞台だからとよく言われていますけれども、それで社会と関わることに喜びとか意味を見出している中で、精神性を磨いてきたのではないかと。すぐ身近なところで言えばお祭りなんかもまさにそうですし、私は商店街で育ちましたけれど、商店街なんかもそうなのですが。そこに国内外から様々な人材を京都に定着してもらいたい。今、アイバン・ザオさんの話がありましたが、例えば京都府域の南の方で、和束町では、外国の方が２週間とか滞在して、お茶について、生産現場もそれからもちろんお茶の作法とか、様々な茶のことを学ぶためだけに２週間滞在するような施設が民間ベースででき上がっているようなこともありますし、この間、総合計画の改定のためのいきいきトークを南丹市でやった時に、旅行代理店のようなことなのですが、京都府の北部の土を学びたいという人。土に興味がある人がいるんですよ、世界中には。水を学びたいとか、水源の里もあるし。で、そのような人を募ると、かなりの方が来られて、それで旅行の工程とかを組んで。もちろん観光もされるとは思うのですけれども。実は我々が知らないところでも、様々なステイについては行われていますし、多分民間企業ベースでも行われていますが、それはもう少し組織的にというか、システムとしてできるということは府域でもあると思うのですが。京都だと、「私、実はこないだ京都行ってきました」と言われ「何で言うてくれへんの」みたいなことをよく言うことがあるんですけれど、こっそり来ている人はいっぱいいる。それはもう既にネットワークを持っている人とか、定期的に来ている人とかもいます。それは色々な所で行われている。そこをどの辺りが足りなくて、どのような施策を打てば、より横の連携ができるとか、活発になるみたいなことの入り方をすればいいのではないかと、個人的には思っているのですが、どうしているかまだ分からないのですけれども。

○松井市長

それは、おそらく府市で色々な事例を交換しながら、プログラムを出し合っていくと面白いのではないですかね。私もこの前、京北地域に入らせていただいて、そこで、府市伝統産業対話会議でも、知事はあの時、別の御公務でいらっしゃらなかったかもしれませんが、小山ティナさんという人が工房をやっておられるのですよ。木工。彼女は能登で塗りの工房をやって、京都市内で金継ぎをやって、京北地域では木工をやって、信楽では陶芸をやっておられるのですが、そこに外国の方ばかり４人来ておられて、アメ

リカ２人、オーストラリアと、香港だったか。４人の方々が来られていて、住まいは民家にシェアして住んでおられて。でもその方々は、そこの木工の職人だけでなく、週末などは京都市内とか、逆に日本中を旅行したりして、このようなプログラムを求めておられるんですね。職人系だけではなくて。だから、色々な組み合わせができるのではないかと思います。

色々と議論して、意見交換は大体以上のようなことにさせていただきたいと思いますが、今の話、もし補足があれば、それも含めて西脇知事から、この今回のフリートーク全体を通じて、何か御発言がございましたらお願いいたします。

〇西脇知事

冒頭申し上げましたように、我々、府の総合計画を作る。もちろん京都府の総合計画なので、様々な独自の政策もあるのですが、かなりの部分は元々府市トップミーティングで議論した課題に関係することもあるし、それ以外にも様々な観点が出てくるということです。これから議会の議論とかパブリックコメント等で意見を聞きながらブラッシュアップしていきたいと思いますので、是非とも松井市長にもまた、御助言も御示唆もいただければありがたいと思っています。

それから、今日は具体的な施策の合意事項はないのですが、元々このような骨太の大きな議論をしながら、またそれを施策に落とし込んでいくということをプロセスとして繰り返していくことが実は重要なのではないかと思っておりますので、今回は、元々去年の秋にやった本質的な価値という、そこからスタートしたことの第２弾ということで有意義な議論ができたと思っておりますので、どうもありがとうございました。

〇松井市長

ありがとうございました。予定されていた時間もまいりましたので、本日のトップミーティングは以上で終了させていただきたいと思います。本年度２回目の開催ということになりました。今、知事からお話がありましたように、１回このような基本構想あるいは総合計画の、それぞれのそもそもの政策の幹に立ち返って、それから、我々も提起をさせていただいた京都未来戦略会議における議題をどう受け止めるかということを含めてのお話になりましたので、必ずやこれがまた次以降のトップミーティングで、それを府市協調でどんな事業に具体化させて、協力関係を発展させていけるのかということにつながるかと思います。

次回のトップミーティングは、また今日のような課題の検討が進んだ段階で開催させていただければと思いますので、関係者の皆さん、よろしくお願いいたします。御協力ありがとうございました。